



**輝石戦隊
キボンスジャー**

戦隊ヒロインは
サキュバスの甘い罠で調教される

**サキュバスの
レズ調教編**



荒々しい罵声と狂喜の声が渦巻き、まるで地鳴りのようにリング全体を震わせていた。観衆の視線は、一斉に奏へ突き刺さり、彼女の羞恥と怒りを煽っていった。

奏は、その荒々しい罵声と狂喜の声を正面から受け止めながら、先程までの戸惑いを振り切ったかのように――。

ダダダッ！！

一気にサキュバスとの間合いを詰めるように踏み込み、高く跳び上がった。

「はぁあっ！！」

ドカァッ！！

戦闘訓練で鍛え抜かれた奏の――。突き出した両脚が、サキュバスの胸をドロップキックで蹴り飛ばした。

ダダダァン！！

サキュバスの身体は後方へ弾かれ、前倒しにマットに叩きつけられると――。

「ヤァァァァァァァッ！！！」

すかさず奏は、うつ伏せに倒れたサキュバスの背中に跨り、顎の下に腕を回して後ろから引っ張り上げると――。背骨を反らせる関節技、キャメルクラッチを極めた。

ググググ……ッ！！

だが、下から覗くサキュバスの横顔は、苦痛に歪むどころか艶やかな笑みを浮かべたままだった。

「はぁん……♥ 背骨がきしむ、この感じ……っ こういう苦痛も、たまには良いわねえ〜♥ もっと強く引っ張りなさいよお〜♥」

「くっ…！ それじゃあ、望み通りにしてあげるわ…！！」

奏は覚悟を決め、サキュバスの背骨を折るつもりで、さらに力を込めた。

「でやぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！！」

だが、その背後から——。蛇のようにしなやかなサキュバスの尻尾が忍び寄っていた。

ぬるっ…ぬるっ…ぬちやり…

「！！」

その背中にひやりとした感触を覚えた瞬間、奏は反射的に力を増した。

ググググググググ……ッ！！

「くっ……！ 絶対に……折ってやる！！」

しかし、サキュバスの狙いは、技からの脱出ではなかった。

艶めいた笑みを浮かべながら、尻尾の先端は奏の背中をまさぐり、戦隊スーツの繋ぎ目——。脱着部分を探っていたのだった。

「さぁ〜て、どこかしらぁ？ 奏ちゃんを緊縛しているスーツのチャックは？」

「……！！」

戦隊マスク及び戦隊スーツは、変身ブレスレットによって脱着が行われ、変身者本人の意志によってのみ操作できる仕組みになっている。

しかし、戦闘中に負傷した場合や意識を失った場合など、緊急時の対応を考慮し、他者による脱衣も可能とされていた。応急処置や手術を受ける際に、迅速にスーツを外す必要があるからだ。

そのための機構は、首元——。通常は戦隊マスクに覆われた部分に、巧妙に隠されていた。

だが今は、露わになった奏のうなじに、そのロックされた状態で小さな専用ボタンが存在しており——。ロックを解除して、それを押せば背中に縦のファスナーが現れ、ウェットスーツのように背中から下へと脱ぎ下ろすことができる。

知る者にとっては、明確な弱点とも呼べる部分だった。

（っ……！？ まさか……それを……！）

奏の背に、冷や汗が伝った。

「ぬ・が・せーッ！！」「ぬ・が・せーッ！！」「ぬ・が・せーッ！！」

その欲望渦巻く歓声は、血の気が引く奏を煽り——。リングの熱気は、否応なく上昇していった。

「ふふっ♥ 折るか、脱がされるか……どっちが先か、観客も楽しみにしてるみたいねえ〜♥」

うねる長い尻尾が、奏の背中を撫でながら、首元から腰へと這うように——。まるで隠された鍵穴を探し当てるかのように、執拗にスーツの縫い目をなぞり続けた。

奏は、焦った——。このままでは、何も守れなくなる。

「音声モード！ 両腕部、リミッター解除！スピリットドライブ発動！！」

そう叫んだ瞬間——。変身ブレスレットのコントロールパネルが光を放ち、視界の端に赤い警告と共にメッセージが走った。

【両腕部リミッター解除 解放開始】

[ARM UNIT LIMITER RELEASE - SYSTEM UNLOCK]

【パワー出力：装着者の闘志連動モードへ移行】

[POWER OUTPUT: SHIFTING TO WILL-SYNC MODE]

それは、烈火のごとく——。奏の戦隊スーツの両腕が急激に膨張し、スーツごと筋肉が盛り上がるように変化していった。

モリモリモリ…ギュギュギュギュ…！！！！

きしむような音を立てながら形を変え、桜色に輝く戦闘スーツが筋肉を覆い——。まるで、獰猛なゴリラの腕を思わせる巨腕に変化した。

グググギギギギギギッギギ……！！！！

「これなら…！！ 折れるまで逃がさないっ！！」

奏は、その勢いのまま——。サキュバスの背を極めていたキャメルクラッチの力を、一気に数倍へと跳ね上げた。

ギギギギギギッギギギギギギギ……！！！！

「でえっやあああああああああああああつ……！！！！」

必死の形相で力を込める奏の瞳は、焦りと闘争心が入り混じったものだった。

彼女が発動させた〈スピリットドライブ〉には、時間制限があり、使用後は戦隊スーツの機能が完全に停止してしまう——。諸刃の剣であることを、奏自身が、一番理解していたのだ。

そんな彼女のイチかバチかの決断にも拘らず——。サキュバスは、顎を極められながらも苦悶どころか恍惚とした笑みを浮かべていた。

「駄目よお～！駄目！駄目！女の子が、そんな姿になっちゃあ、美しくない！
美しくないわよお～♥」

奏の全力を、まるで幼子の戯れか、退屈しのぎのお遊びにすぎないとでも言うように、女王の余裕を帯びた妖艶な笑声をこぼし続けた。

「早く、生まれたままの本当の奏ちゃんの姿に戻してあげなきゃあ〜……駄目なのお、駄目！駄目え〜♥」

「黙りなさいっ！！　これで、絶対に終わりっ！！！！　」

ギギギギギギッギギギギギギギギ……！！！！

「フルパワーああああああああっ！！！！」

グギギギッガガッガガッガガッガガ……！！！！

サキュバスの身体は、まるで背骨が完全にへし折れているかのような姿を見せていた——。だが、奏の背後では、長い尻尾がしつこく這い回り、戦隊スーツの首元をなぞり続けていたのだった。

にゆるにゆる…にちゃ…にちゃ…ぬちゃり…

その先端は、獲物の舌のようにウゴめき……。隠された専用ボタンを探し当てようとする執拗な動きは、決して止まる事はなかった。

その時だった——。

「うふ…♥ これかしら？ …♥」

突然、ひときわ強く尻尾がしなり、その尻尾の先が——。捕食する舌のようにも見えた柔らかな形は、硬質な刃へと変貌した。

ジャッキーーーン！！

そして、その煌めきは不快な音と共に——。奏の腰に巻かれていた戦隊ベルトを切り裂き、尻尾で弄ぶようにして、それを掲げた。

「なっ……！？」

その瞬間、奏の両腕に宿っていた獣じみた筋肉の隆起が、まるで空気が抜けるようにしぼみ始め——。桜色のスーツを膨張させていた巨腕は、急速に細く、元の女性らしい腕の形へと戻っていった。

時間制限には、まだ余裕があった。だが、戦隊ベルトこそが、キボンヌサーベルや装備を収納し、さらにスーツのパワーコントロールを司る重要なコアだったため——。ベルトを失った奏のスーツは、瞬く間に“通常出力”へと強制的に戻され、戦士としての鎧と、その威圧感を剥ぎ取られてしまったのである。

「う、嘘……！？ そんな……！」

ウオオオオオオオオオオオオオオ！！

奏の声は、観客席を埋め尽くす戦闘員たちの歓声にかき消された。

ベルトを外された奏の身体の曲線は、戦闘用の膨張した腕が消え去ったことで——。胸から腰へ、そして太腿へとつながる“滑らかな肉感のライン”が露わになり、密着スーツに包まれた豊満なプロポーションは、もはや戦士としての象徴ではなく……否応なく“女の肉体”を見せていた。

「ほおら♥ やっぱり、こっちの方が似合ってるじゃなあい？ 武骨な筋肉なんていないの♥ 女らしく、綺麗に……♥ それでこそ、観客も喜ぶってものよお〜♥」

腕の力が通常モードに戻ったとはいえ——奏は必死にサキュバスを抑え込んでいた。

その間も、サキュバスの尻尾は奪い取った戦隊ベルトを、まるで戦利品のようユラユラと弄んでいた。

「ふふ……奏ちゃんの大事な命綱は、コレなのかしら？……これを壊したら、どうなるかしらねえ〜♥」

破壊されたとしても、戦隊スーツを脱着する機能は備わっていない。だが、戦隊スーツを脱着させるための専用ボタンのロックは、このベルトによって管理されているのであった。それを破壊されれば……。

サキュバスの挑発的な言葉に、奏は拭うことが出来ない——。額から流れる汗が、彼女の焦りを物語っていた。

「……………」

頭の中を必死に考えても、打つべき手は浮かばなかった。

スピリットドライブの強化も封じられ、ベルトを奪われた今、どうすればいいのか——。

目の前のサキュバスを押さえつけながらも、胸の奥では『このままでは本当に脱がされる』という羞恥の恐怖が広がっていくばかりだった。

そして、奏の必死な抗いも虚しく、そのサキュバスの尻尾は——。

グギィシャー——ン！！！！

戦隊ベルトのバックル部分を貫き、粉々に破壊した。

「！！！！！！」

破壊された戦隊ベルトは、ただの金属の欠片と化し、無惨にリング上へと転がった。

ガラガラガラガシャ……ン ガラン… ガラン…

そんな奏を尻目に、戦隊スーツが解除されない様子を感じたサキュバスは、艶やかに舌を鳴らした。

「なあ～んだ…… これじゃあ無いのお～♥」

サキュバスは、あえて気楽そうに言い放ちながら——。心の奥では、獲物の反応を舐めるように味わっていた。

ほっと胸を撫でおろすのか、それとも“次を狙われる”恐怖に震えるのか。ど

ちらにせよ——。奏の心が揺れる瞬間こそ、何よりの愉悦だった。

そして、次なる標的を定めるかのように、サキュバスの尻尾は、しなやかに蠢き——。奏の腕に装着された変身ブレスレッドへと伸びかけた。

だが、その直前、サキュバスは——。これまでに無かった“奏のうなじ下に存在するボタン”を、尻尾の触覚で探り当てた。

「あはっ♥ 見い〜つけたぁ♥ ここね…♥ こんな無防備なところに、着けちゃってえ〜 アタシなら、股の下にでも仕込んでおくけどねえ〜」

「……！！！！！」

尾の先端は、そのボタンを焦らすように押し沈めた。

その瞬間——。

カチャ…

奏の首筋で、小さな音が轟いた。

「っ……！！」

すると、今まで繋ぎ目など無かった戦隊スーツの背中に、不思議な形をしたジッパーラインが現れ——。

「ふふふ♥ 見つけちゃった……♥ 出てきた♥ 出てきたぁ〜♥ 脱皮の準備は完了よぉ〜♥」

観衆の歓喜が一段と大きくなり、リングを揺るがすほどの熱狂が巻き起こった。

「ぬ・が・せーッ！！」「ぬ・が・せーッ！！」「ぬ・が・せーッ！！」

連呼する声が耳を刺す中——。サキュバスの尾先は、二枚舌のような形に割れ、ジッパーラインのスライダーを掴み取った。

カチリ——ジィィィィ……ッ！

「や、やめなさいっ……！ 私は……戦士なのよ……っ！」

「ふふん♥ 戦士？ もう観客には、可愛い着せ替え人形にしか見えてないわよ♥」

戦隊スーツの合わせ目がゆっくりと割れ、そこから奏の素肌——。艶やかな背中
中の白さが、否応なく晒されていった。

「もっとも、着させてあげる服なんて無いけどね！！…♥」

そう言ってサキュバスは、自在に動く尻尾をうねらせた。

それは、まるで瑞々しい巨峰の皮をスリと剥き取るかのように——。奏の身体を戦隊スーツを半分あらわにさせると……。

「きゃあっ……！」

ブンッ！

次の瞬間、サキュバスは自分の身体から奏を引き剥がして、戦隊スーツごと宙に放り投げた。

「きゃああっ！！！」

奏の汗で煌めく長い髪とともに、白い背中がリングの光に影を落とすと――。

ビリビリビリィィィィ……ッ！！

サキュバスの鋭利な尻尾の先は、内側から戦隊スーツの繊維を無惨に裂きながら、奏の裸体を徐々に晒していった。

「いやあああああぁっ！！……っ！！」

奏の戦隊スーが完全に剥ぎ取られると、隠されていた果実が弾けるような、その肉体が露わになった。

そのたわわに実った乳房は、まるで果汁が滴る蜜玉のようであり、その弾力は躍動するたびに柔らかい光沢を放った。

空を舞う奏の姿に、観客席が一瞬ざわめきを呑み込み、静まり返っていた。

その沈黙は、誰もが釘付けになった証であった。

そして、リングのマットに落ちてきた奏の姿には、もはや戦士の面影はなかった。

残されているのは、腕に巻かれた変身ブレスレッド、そしてグローブとブーツだけだった。

「……ぐっ……！」

奏は、しゃがみ込むようにしながら、陰部を晒してしまった股をギュッと閉じ、両腕で必死に押さえつけても抱えきれないほどの豊満な乳房は揺れ——。隠そうとする仕草そのものが、観客の視線を誘っていた。

ウオオオオオオオオオオオオオオオ！！

羞恥に震える声を漏らしながら、必死に胸元を覆い隠す奏が、顔を上げると——。視界の先には、戦隊スーツの残骸が舞い落ちてきた。

その引き裂かれた繊維は、光を受けてひらひらと舞い散り——。まるで、切り裂かれた天使の翼が散っていくかのような光景が、奏の瞳に映っていた。

そんな奏の様子を嘲笑うかのように、サキュバスは口を開いた。

「戦隊スーツの上からでも分かっていた事だけど……奏ちゃん、お毛々を整えているのはいいけれど…パイパンにしてみるのも、いいものよお〜♥」

背骨をへし折られた状態だったはずのサキュバスが、何事もなかったかのように伸びをしながら、ゆっくりと奏へ歩み寄ってきた。

「男とのぶつかり合いの時に、クリトリスを直接、押し付けられて…すんごく気持ちいいんだからあ〜♥」

その指先は自らの股間へと伸び、突き出したクリトリスを“くにゅり”と弄び

ながら、観客にまで聞かせるように甘い声を漏らした。

サキュバスの淫らな言葉に、奏は——。観客の視線と自らの裸身の恥ずかしさで、耳を貸す余裕などなかった。

羞恥に震える奏の心情とは裏腹に、その果実は甘く熟した艶を放ち、観客の欲望をさらに煽っていた。

そんな全身に突き刺さる視線を感じていた奏は——。

「……っ……まだ……終わってない……！」

それでも、彼女の瞳の炎は絶える事なく、サキュバスから逸らさぬまま、腕へ巻かれた変身ブレスレッドへと、手を伸ばした。

「エマージェンシー！ スペアスーツ！ セットアップッ！！！」

ピカァァァァァ——ッ！！

眩い光が奏の裸体を包み込み、リング全体を照らし出す。

観客のざわめきが、一瞬かき消され——。

次の瞬間、奏の肢体はまっさらなピンクの戦隊スーツに覆われていた。

だが同時に、その姿は不完全でもあった。

戦隊ヘルメットと戦隊ベルトは高性能な機能を持つためスペアは存在せず、奏の身体を覆っているのは戦隊スーツだけ。

それも真新しく清潔なまっさらの状態で、彼女の肌を守っているに過ぎなかった。

このスペアスーツは、あくまで“予備”。

スピリットドライブをはじめとした必殺技を発動する力は備わっておらず——戦士としての攻撃力を奪われた、純粹に防御のためだけの装備だった。

奏は、再び戦隊スーツを身につけた事で、ほんの少し冷静さを取り戻した——。

さすがに、これ以上醜態を晒したくなかった奏は、サキュバスとの一対一の勝負に拘るのはやめて、ブレスレッドを使って、仲間への通信網を開いた。

「こちら、キボンヌピンク！応答して！」

奏は震える声を押し殺し、ブレスレッドに向かって呼び掛けた。

そんな奏の必死な顔に——。サキュバスは、呆れたように片眉を上げ、艶めかしい笑みを浮かべた。

「んっもお〜！ 焦らされるのは、嫌いじゃないけどお……♥」

ヒュルルッ——！！

「もういい加減、奏ちゃんワガママには、付き合いきれないわよっ！！」

それは、突然——。

「キャッ！！」

奏の足首に、サキュバスの尻尾が絡みつки、そのまま蛇のように全身を覆うように駆け上がった。

シュルルルッ！！ ギチィィィッ！！

「きゃああああああああッ！！！」

そして、たちまち奏の身体は締め付けられ、ブレスレッドを着けた腕だけを突き出すような無防備な体勢に固定されてしまった。

「ぐうっ……！！ このっ……離しなさいよお……っ！」

その肌に絡みつく尻尾は、奏にとって、ただの拘束だけで終わっていなかった——。再び、妖艶な霧に包まれたかのような甘い感覚がじわじわと蘇り、彼女の理性を容赦なく軋ませた。

「ぐぬう…！！」

（い、いやあ……っ…… また、あの時みたいに…… か、身体が…… 熱くなってきちゃう……！）

「感謝して欲しいところよお～ 本当なら、アナタの手首ごとコレを奪うだけのことだったのにい～ 奏ちゃんの可愛い身体を傷つけたくなかったから、この小技まで使ってるんだからあ～ ありがたく思いなさいね♥」

サキュバスは、ゆっくりと奏の腕から変身ブレスレッドを剥ぎ取り、その指先で弄ぶように掲げた。

「さて……コイツをどうしようかしら？ 返して欲しい？ それとも……解析

して、アタシの戦闘員たちに新調して着せてあげようかしらねえ〜♥ あは…♥
そう言えば、もうすでに、手に入れてたんだあ〜」

「なっ……！！ “手に入れた” ですってえ？！！」

奏は、サキュバスの尻尾に締め上げられたまま——。胸の奥を締め上げるような悪い予感に襲われた。

バキっ——。

その直後、サキュバスは、そのブレスレッドを素手で握り潰した。

バキバキバキィィィッ！！

無惨に粉碎され、煌めく破片がリングに散り——。サキュバスに拘束され、身動きが出来ない奏は、ただ呆然と眺める事しか出来なideいた。

「そんなに、仲間に会いたいのぉ？……それなら合わせてあげる♥」

サキュバスは妖艶に微笑むと、奏を拘束したままの尻尾を、高々と掲げ——。

「さぁ……四人を、ここに出しなァ！！」

その声がリング全体に響き渡ると——。

ガシャァァァンッ！！ ドゴォォンッ！！

天井から四条の鎖が垂れ下がり、爆ぜるような轟音と共にリングを揺るがした。

ガンッ！！ ガンッ！！ ガンッ！！ ガンッ！！

続いて、四方のリングポストに、大地を裂くような衝撃が突き刺さると——。
人柱を思わせる不気味な支柱が、舞台を囲むように姿を現した。

ジャララララ……ッガシャリッ…ガシャリッ…ギシギシッ……

鎖がきしみ、鉄と肉体がぶつかる鈍い衝撃音が重なり合っていた——。

そこには、磔にされた人の姿があった。

身体は、無惨にも揺れ、うめき声すら発せられない状態に猿轡を咥えさせられ、無力にぶら下がっていた。

「なっ……！！ みんな……っ！！」

奏の瞳に映ったのは——。戦う力を奪われ、観客に晒される仲間たち——。キボンヌジャーの男性メンバー四人だった。

「……っ！！！」

四人は意識こそあったものの、猿轡を噛まされているせいで、まともな言葉を発することは出来ず、苦しげなうめき声を漏らすばかりだった。

サキュバスの尻尾に拘束されたままの奏は、ふいに——。仲間たちの下半身が無惨に剥き出しにされていることに、気づいた。

「なっ…！？」

奏は、仲間のソレを直視する事が出来ず、思わず視線を逸らすように——。サキュバスを睨みつけた。

「なんて酷い事してるのよっ！？」

「あは♥ 気づいちゃったあ〜♥」

サキュバスは、楽しげに尻尾を揺らしながら、奏の視線を無理やり仲間たちの一人一人のイチモツへと誘導し始めた。

「奏ちゃん、しっかり見てみてえ〜♥ コイツらの前立腺をイジくってやったから、ずっと勃起状態になってるの〜♥ だ・か・らあ〜いつでも、男の肉棒が楽しめるってワケえ〜♥」

必死に顔を背ける奏だったが、視界の端に映る肉の張りと小刻みな震えが、嫌でも目に入ってしまい——。四人の陰部が、屈辱的に勃起させられていると……奏は、悟らざるを得なかった。

「待っててえ！！みんなあ！！必ず、私が助けてあげるからねっ！！」

必死にサキュバスの尻尾から抜け出そうと、身をよじらせる奏だったが、その姿を愉しむようにサキュバスは笑い、観客へと視線を向けた。

「それじゃあ、なかなか始まらない試合に観客たちも退屈だろうからあ……ここらでファンサービスでもしてあげようかしらあ〜♥」

わざとらしく声を張り上げ、艶めいた笑みを浮かべると――。

サキュバスは尻尾で奏を無造作に持ち上げると、そのまま観客席へと投げ飛ばした。

「脱着ボタンは、首の後ろだよお〜！！ さあ〜みんなあ〜、楽しみなあ〜♥」

「きゃあああああっ！！！」

リング外へ転がり落ちた奏は、スペアスーツゆえにキボンヌピンクとしての力を十全に発揮することが出来ず――。

無数の戦闘員たちに群がられ、あっけなく押さえ込まれてしまった。

バチンッ！！ ジィィィイツ……！

首筋のボタンを押され、ジッパーが一気に引き下ろされた。

戦隊スーツは強制的に脱がされ、もみくちゃにされながら、奏の身体は次々と露わにされていった。

「いやあっ！！ やめてええっ！！ 触らないでえええっ！！」

【体験版おわり】